

# 文化高知

2009年3月 NO.148



「春」 角田美和

〈もくじ〉

貧乏が親の遺してくれた財産 .....	松原和廣	2
高知の市民まちづくりは継続できるか? .....	卯月盛夫	3
公開審査は審査する側も自分をさらけ出す「賭け」 .....	榎木野衣	4~5
サンタの国から〈前編〉 .....	渡辺知子	6~7
大好き!ばく・わたしの故郷 .....	門田雅人	8~9
ナマステ ネパール! (中) .....	嶋崎京都	10
言葉の現場から⑭ 「ローマの休日」のなぞを読み解く .....	広井 護	11
高知のギャラリー⑩ ベーバー・ラボ ギャラリー .....	刈谷友彦	12
1月~2月の事業から .....		13
風俗歳時記・風伯 .....		14~15

本棚を整理していると、一冊の本が目にとまった。

「兄弟の間でよく言うんです。貧乏だったことが、親の遺してくれた唯一最大の財産だったな」と。

これは、高知新聞社が出版した『伝えたい 土佐の100人 その言葉』の中の一節である。

それはカシオの創始者、樫尾忠雄氏のことばだ。

土佐の歴史上の人物百人を選び、その人たちが残したことばを次代に伝えていこうと連載され、一冊の本にまとめられたものである。

この百人のことば、一人ひとりそれぞれの生き方を通して語られたものであり、この人にして「さもありなん」と思うことばが続く。

その中でも冒頭の樫尾氏のことばには、共感的な人間臭いドラマが展開する。

彼は、「貧しい中で懸命に生きる両親の姿、それが無言の教育だった。貧乏はしても、暮らしはいつも楽しかった」。

戦時中、東京の下町で旋盤ひとつで町工場を興し、電子精密機器の「世界のカシオ」まで成長させたそのエネルギー・独創性の源は貧乏だったこと。そして両親の懸

命に生きる姿だというのである。

人間は、太古の昔から親から子へ、子から孫へと様々な価値を引き継いできた。こうした営みが人類の歴史と伝統を築き、今日の発展のもとになっている。それは、様々な技術であったり、文化・伝統であったり、また、精神的な支えとなったりする。

身の回りを見渡せば、地盤・看板を引き継いで政治家になった二世三世議員、莫大な財産を引き継いだ青年実業家、誠実さを受け継いだ人々。

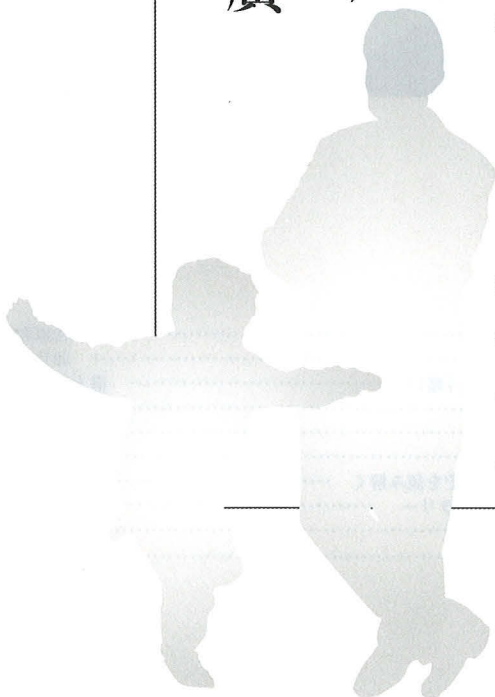
人間は、一つ屋根の下で、親のうしろ姿を見ながら有形無形の多種多様な価値を受け継ぐことになる。

しかし、今、豊かさの中で、どれだけ親が、うしろ姿でメッセージを送ることができているのか。「貧乏が親の遺した唯一の財産」と言わしめることができるだろう。

私たちは、戦後の貧しさの中で、少年時代を過ごした。東京オリンピック、万博に代表される高度経済成長期に青春を過ごし、大学紛争の最中に、大学に通った。すごいスピードで人生を駆け抜

# 貧乏が親の遺してくれた財産

松原和廣



けてきた団塊の世代。今、ふと立ち止まって、人生を振り返ったとき、

「オレは、いったい我が子に何を残してきたのか。いや残そうとしているのか」「残せるだけの財産はないし、確固たる家訓もない」

「最近、うしろ姿にも自信がない」と滑稽に自問自答を繰り返す自分

がいる。

せめて我が子には、「親父も、一生懸命生きてきたんだな」と言わせるような生き方をしたいものだ。

（まつばらかずひろ／高知市教育長）

## 高知の市民まちづくりは継続できるか？

卯月盛夫 公益信託高知市まちづくりファンド運営委員長 建築家・都市デザイナー・早稲田大学教授

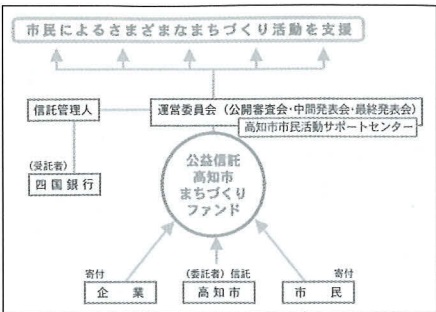


ちも違い、イベントも違うのはあたりまえである。高知の人を「はちきん」や「いごっそう」という表現をするのも、そのひとつの現れである。たぶん、この明るさとおおらかさ、そして自由な気風は、全く視界を遮るものがない太平洋の大海原と三六〇度に広がる空の大きさという環境に依るところが大きい。私は都市で最も重要なことは「自由と自治」であると考えている。したがって高知の自主自立の気質こそが、実は今の日本

では、なぜ私がこれほどまでに高知に興味を持つのか。それは直接的には「日曜市」や「よさこい」という道路を大胆に使うイベントが都市の活性化に役立つので、その研究対象として大きな関心を寄せているからである。しかし、それはあくまでも表面的な理由で、基本的には「高知の人が、なんだか楽しくて大好きだから」である。これまでに知りあった全国各地の人とどこかが違い、日本人とは思えない（？）のである。人間が違うから、生活も違い、ま

日本は、高知のまちづくりに大きな関心を寄せている。「公益信託高知市まちづくりファンド」はこの六年間で、市民からの一〇七の提案に対して、五十九の事業に助成を行った。他都市の事例と比較すると「ストリートイベントが多い」「学生の活動が活発」「子ども

の活動も盛ん」「食のテーマも多い」、また「ものづくりも大好き」という特徴がある反面、「熱しやすく、冷めやすい」、つまりあまり長続きし



http://www.city.kochi.kochi.jp/deeps/10/1020/npo/001-004.htm 「公益信託高知市まちづくりファンド」は平成15年度に市民のまちづくり活動を支援するしくみとして創設された

「公益信託高知市まちづくりファンド」は、この六年間で、市民からの一〇七の提案に対して、五十九の事業に助成を行った。他都市の事例と比較すると「ストリートイベントが多い」「学生の活動が活発」「子ども

の活動も盛ん」「食のテーマも多い」、また「ものづくりも大好き」という特徴がある反面、「熱しやすく、冷めやすい」、つまりあまり長続きし

新しい形での継続を畅想する高知市民を私は期待している。（うづきもりお）



榎木氏左と最優秀賞受賞の佐竹龍蔵さん

## 第4回美術作品コンクールを終えて

# 公開審査は審査する側も

# 自分をさらけ出す「賭け」

榎木野衣

**第** 四回美術作品コンクールの審査を終えて、心地よい疲労感のうち、早くもひと月が過ぎようとしている。仕事から、いままでも数多くの現代美術の審査会に関わってきた。日本を代表する企業が主催する公募展(キリン・アートアワード)、渋谷のど真ん中にあるテナントビルが会場となり社会現象にもなった公募展(渋谷バルコ アーバナート)、著名な物語作家の名を冠し記念事業を兼ねた公募展(岡本太郎賞)、画材の会社がPRを兼ねて広く公募するタイプ(リキテックス・ビエンナーレ)、さらには都道府県のような自治体や公共の美術館が主催するいわゆる「県展」のようなもの、はたまた世界的に活躍する現代美術の作家がそれまでの活動のノウハウを活かして旧来の体制に挑戦した一大イベント仕掛けの公募展(村上隆「GEISAI」)……。そのなかには今でも継続しているものもあれば、

組織改変や社会の移り変わりのなかで、すでに開催を終了してしまったものもある。その後の受賞者たちの活動の行方もそれぞれだ。

ずらずらと羅列して来たが、決して自慢するとうようなことではない。単純に、私くらい多様な現代美術の公募展審査に関わってきた者は、あまりいないのではないかとこのことなのだ。単純に数だけいえば、もっと多くの審査をこなしている人はいるだろう。けれども、一概に公募展といっても、その思惑やありようは千差万別だ。あたりまえのことだが、そのひとつひとつが応募してくる作家や作品の傾向、審査の方法、審査員の個性、そして、それをささえる事務局のありようや、輩出した作家たちのその後の活動状況において、まったく違って来ってしまう。事実、先に挙げたような公募展はすべて、一見すれば似ているようで、実は相当に非なるものばかりだ。

そんな経験があるものだから私などは展覧会の審査を頼まれると、いままでも経験して来た多くの公募展のなかで、そのコンペがどのような個性を持っているのかつい考えてしまう癖が備わっている。では、高知

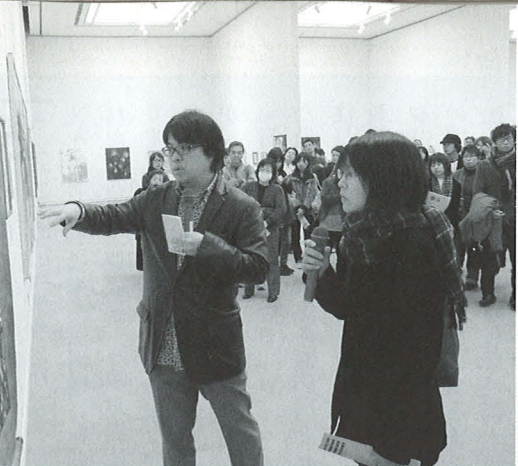
での美術作品コンクールはどうであったらう。

まず、このコンクールの最大の特徴は、なんといっても審査員が一人である、ということだ。これは、あるようで実はあまり例がない。審査というものが、偏りがあってはならないというのが大義名分だから、通常はやはり、出身を異にして別のキャリアをもった審査員を複数、立てたいものだろう。それもわからないではない。ひとりの審査員がすべての決定を行うというのは、当然、そこにその人の個性や価値観の反映があり、「偏り」は免れない。

しかし、反対にその「偏り」に信頼を置き、一任してくれていると考えたときには、どうだろう。実は、審査員はそのとき、複数の審査員がいるときよりも、ずっと真剣にならざるをえない。私が言っているのは、複数の審査員のときは気持ちの緩みがちだ、というようなことではない。複数の人物に委ねる合議というものは同時に責任の分散でもあって、また総意を重んじる以上、ひとりの人物が強力に推すだけでは通りにくい。したがって共同審査では、どうしても個々人の価値判断のカードを落とし、

よくもわるくも無難な線で決定が落ち着きがちなのである(海外のコンペティションなどでは、しばしば自分が強く推す「才能」が落ちた時点で、意思表示のため審査員を降りるようなケースも散見される。私はすべての審査に関わる者は、そのくらの気概を持つべきだと考えているが、日本ではそこまで自分の価値観を押し通す人物は不幸にして稀である)。

その結果、どういうことが起こるだろうか。これは一般化できないことなので、あくまで参考として読んでほしいのだが、こうしたコンペティションでは大賞を得た作家よりも、次点や優秀賞に甘んじた作家のほうが



それぞれの作品の前で作家と対話しながら審査が進む

がその後、伸びるということが少なくない。これは、審査員がおおむね賛じることができたもの(別の言い方をすれば妥協が成立するもの)が最高賞となり、最終的には合意を得られなかったが審査の過程を経てカドが落ちなかったものがそれに次ぐ位置に据えられるようなときに起こるようだ。このように、作家にとつて賞はゴールではなく、スタートラインに過ぎない。ましてや、世間で人が美術に求めているものは平均点などではなく、むしろ心に喰い入ってくるような「カド」のほうなのだ。としたら、「カド」を落とさぬ者がその後、伸びた(「化ける」ともいう)としても不思議ではない。長々と書いて来たが、審査員がひとりであることの緊張感というのは、実はそういうところにある。つまり、共同審査ではあるいは次点に甘んじるとような作品が、常にむき出しでトップに立つのが個人審査なのだ。審査する個人が「いい」と思ったもの、感じたものがそのまま、結果として露出するのである。そこには、合議もなければ多数決もない。それは一種の「賭け」なのだ。それを「偏り」という人も、あるいはいるかもしれない。けれども、ことは表現行為であり創作に関わる事である。作る方も自分を「賭けて」出して来ているのだ。それに対しては、審査する側も「大義名分」など唱えるのではな



く、同じように全身全霊を込めて「賭け」で応えるべきだ。出す者と同様、審査する側も、自分をさらけ出さなければ嘘だ。自分がいまま

生きてきて見て来たもの、そのすべてを「賭け」て相手を見定めるしか無いのだ。

私は、すべての審査がそうである必要はないと思うが、今回の美術コンクールが採用しているこの審査の方式は、審査する側にとつて相当に情熱も体力も知力も問われる仕事であり、立派な個性であると思う。率直にいつて、誰もができる性質のものではないだろう。自分を賭けられず、一人でも内面で合議し、妥協してしまうような性質の審査員は呼ぶべきではない。さいわい、これまでの審査ではどの人も、この「賭け」に耐えられる人物ばかりだ。今後も、ぜひそうあってほしいと思う。

「さわらぎのい／美術評論家・多摩美術大学美術学部准教授」

## 第4回美術作品コンクール受賞作品

 <p>最優秀賞 「冬の散歩道」 佐竹龍蔵</p>	 <p>優秀賞 「ある日の深呼吸とため息と」 瀧石公子</p>	 <p>優秀賞 「winter」 今崎順生</p>
--	--	--

「どうしてフィンランドに？」

「この国の印象はどうですか？」  
フィンランドに来て、何度こう聞かれたらう。他のヨーロッパ諸国よりまだまだ移民や外国人の少ないこの国では、皮膚や目や髪の色の違いが、つい目立ってしまう。

日本から一番近いヨーロッパ、また最近では教育水準の高い国として注目され始めたフィンランド。サンタクロース、ムーミン、サウナ、キシリトール、北欧デザイン、森と湖の国：何となく透明感のあるような知っているようで知らない国。

修士課程で学びたいと、日本国内の大学院を探していた私が、偶然インターネットで見つけたのが、ヴァーサ大学。フィンランドの西海岸に位置する都市ヴァーサに移り住んで、はや一年半…。

フィンランドと私は、以前から何か不思議な「赤い糸」でつながっていました。一九八八年、当時短大生だった私は、デンマークのオーデンセに住むペンフレンドに会うため、初めてヨーロッパの地を踏みました。格安航空券（それでも今に比べずつと高く二十数万円）で、大阪ーシンガポールーアラブ首長国連邦のドバイーギリシャのアテネを乗り継ぎ、コペンハーゲンへ。そこから、車、



クラスメート等が各国の料理を持ち寄って「インターナショナル・フード・パーティ」（2008年12月）

会いに行きなさい」と、サンタクロースの住所を書いてくれました。簡単なすぎる住所に、少しくさん臭さも感じながら、なぜかしら小さな夢ももらった気がしました。

この出会いから七年後の一九九五年夏、三カ月間バックパックを背負ってヨーロッパのいろいろな国を巡り、ついにサンタクロースのいるフィンランドにやってきました。列車の窓から見る風景は、どこまでも続く平坦な道。白樺の白い色と空の青さが映え、空がとても近く感じました。町を歩いていても、お店に入っ

# サンタの国から

渡辺知子  
《前編》



フィンランド人の友達と独立記念日の式典に参加（2008年12月8日）

フェリー等で、ようやくオーデンセに着いたのは、大阪を離れて二日後のことでした。  
デンマークでの楽しい滞在を終え、日本に帰る飛行機で隣り合わせになったのは、大きな体の、ムスツとしたおじさん。でも、なんだかとても気になって、ビールを飲んで少し陽気になり始めたおじさんに、どこから来たのか英語でたずねてみました。



パースデーパーティ（2008年11月）

が、一向に通じません。おじさんは「スオミ」とぶつぶつ繰り返すだけ。スオミって何？そんな国聞いたことないけど…？戸惑う私に、おじさんは胸元からペンを取り出し、地図を描き始め、何度も「スオミ」「ヨウルプッキ」とつぶやきます。身振り手振りも交え、なんとか、これが「フィンランド」「サンタクロース」という意味だとわかりました。フィンランドってフィンランド語でスオミなの？不思議な言葉…。実はこれが私とフィンランドの最初の出会いでした。  
おじさんは、「サンタクロースに

でも、静かでのんびりしたところだなあと印象。それから十二年後の二〇〇七年夏、留学のためフィンランドにまたやってくる時は…。  
そんな「赤い糸」に手繰り寄せられるようにして来たフィンランド。私は、現在ヴァーサ大学院で異文化コミュニケーションを専攻し、十六カ国（フィンランド、ノルウェー、ロシア、リトアニア、ドイツ、トルコ、モロッコ、イラン、ウガンダ、ナイジェリア、カメルーン、アメリカ、メキシコ、中国、韓国、日本）二十一人のクラスメートとともに、日々楽しく学んでいます。大学の授業はもとより、クラスメートとの何気ない日常の会話がまさに異文化コミュニケーションで、お互いの言葉や習慣を教え合ったり、聴いたばかりの講義のことに意見を交わし合ったりと、話題に事欠くことがありません。みんなで勉強したり、料理を作ったり、映画を観たり、外でパーベキューをしたり、またそりすべりに行ったり…と、それぞれの季節に、いろいろなことを楽しんでいます。

ヴァーサは、ボスニア湾に面し、太陽が燦爛と輝くところとして知られ、フィンランドでも比較的温暖な場所です。海のそばのため、風が強くと、冬には体感温度が、実際の気温

よりぐっと下がります。十二月〜二月のある時期には、海面が凍り、湾の対岸までスキーや徒歩で行くことができます。私も去年の冬に、大学裏の凍った海面に降り立ち、図書館で勉強している人たちを眺めながら少し歩きました。自分が海の上にいるのがとても不思議で、どきどきしたものです。  
こちらの人は一年を通して、水辺や森を散歩します。たとえマイナスの気温でも、天気がいい日には子ども連れで散歩をしている人、赤ちゃんを乳母車に乗せて歩いている人をよく見ます。日照時間の極端に少ない冬は、特に、ビタミンD不足になりやすいので、できるだけ外に出て太陽を浴びる必要があるからだそう

です。  
雪の降った日に、太陽が回り一面を照らし、きらきらと輝くまぶしい雪道をキュッキュと音を立てながら歩くのは、とても気持ちのいいものです。また、寒い外から帰り、暖かい部屋の中で（室温二十度くらいに設定されています）冷たいアイスクリームを食べるのは、格別のおいしさ。  
今では、フィンランド人の友達と親しくなったおかげで、料理を習ったり、一緒に散歩したりする中で言葉や習慣を学び、フィンランド流の生活が少しずつ板についてきました。

（わたなべともこ／大学院生）



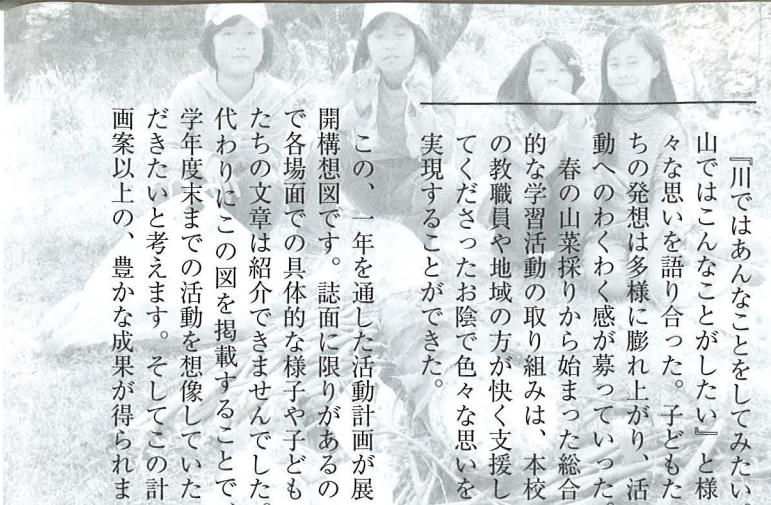
凍った海の上を歩く（2008年1月）

ヴァーサ大学キャンパス（2008年5月）



これまで三回の連載を通して、米奥小学校と、四万十川や学校林を中心にした自然や地域との関わりを深さを書いてきました。けれども、子どもたちの活動を少ししか紹介できなかったことが気がかりになっていました。最終回の今回は、高学年の年間の取り組みと、子どもたちの変化を中心に紹介してみます。

高学年は「大好き！ぼく・わたしの米奥―四万十川と学校林を結んで―」と題して、活動を展開してきました。担任の山脇教諭はその取り組みを次のように述べています。



「川ではあんなことをしてみたい山ではこんなことがしたい」と様々な思いを語り合った。子どもたちの発想は多様に膨れ上がり、活動へのわくわく感が募っていった。春の山菜採りから始まった総合的な学習活動の取り組みは、本校の教職員や地域の方が快く支援してくださったお陰で色々な思いを実現することができた。

この、一年を通じた活動計画が展開構想図です。誌面に限りがあるので各場面での具体的な様子や子どもたちの文章は紹介できませんでしたが、代わりにこの図を掲載することで、学年度末までの活動を想像していただきたいと考えます。そしてこの計画案以上の、豊かな成果が得られました。

した。

米奥の山々に芽吹いた植物、校庭にある梅やヤマモモの木の実の採集や加工は、職員や地域の方の応援があつて随分順調に、しかも大きな驚きとともに進められました。

「たらの芽」や「イタドリ先端」はてんぶらに、「こんずい」はゆがいてマヨネーズで食べ、竹の子は学校で茹で、家に持って帰りました。「竹の子ごはん」「煮物」「おひたし」など、家庭の食卓の報告が子どもたちからありました。

# 大好き！ ぼく・わたしの故郷

## 総合的な学習が 主体的子どもを育てる

門田雅人

は、感じたことを折にふれて書き綴っています。

四時間目に梅の作業をしました。水砂糖を大量に入れました。こんなに入れているのかというくらい入れました。水砂糖を食べてみました。あめみたいでおいしかったです。意外と口の中で長持ちしておながすいたときにはびっくりだと思いました。

どんな梅ジュースができるのか楽しみでした。

担任は、そのころの学級通信に率直な文章を載せていました。

学校の梅の木がたくさん実をつけました。梅ジュースやサワードリンク・梅干しにしようということになり活動開始。無農薬なので収穫しても捨てる梅も多かったです。

スーパーに行ったらなんでも手に入る時代だから、子どもたちの感覚もおやつは買って食べるのが当たり前、の音が聞こえてきます。こんな身近に色々食材があったことに、私も子どもも大満足と同時に幸せを感じました。

また、色々なものを収穫する作業を通して手際がよくなりました。子どもたちの姿がありました。

夏休みの調べ学習で保存食につ

できた。

と、子どもたちの成長を述べ、こうまとめています。

子どもたちは、現在の学年にやるまでに総合で色々なことを体験してきている。中でも川遊び・カレー体験は最も好評な活動になっ

いて色々聞き取りをしたり、ネットで調べたりしている子どももいました。来年は、漬物にも挑戦してみたいですね。

二期期から、子どもたちは山と川の二つのグループに分かれ、それぞれが企画を立て、実践は両グループ合同で行いました。山班は、①ソリハウスができるまでの経過調べ②学校林にある樹木の特徴③一学期の活動の継続を、他方、川班は、①上流、下流域の様子の変化②川での遊びや川漁について③水質検査・水生生物調査を実施しました。

「山の日」の取り組みとして十一月に実施した参観授業の後には、学級通信に感想を書いています。

○竹の笛や竹とんぼをもらってとてもうれしかったです。それともよく飛ぶ竹とんぼでした。プランコもできていて、二人乗りのやつがとってもおもしろかったです。ロープだったのですごくうれしかった。

○餅つきは去年より力強くつきたと思います。味見をしたら、新しい餅で感じでおもしろかったです。お餅を丸くするのは、もちもちでおもしろかったです。捨うのはあまり取れませんでした。

担任は総合的な学習を実践した年

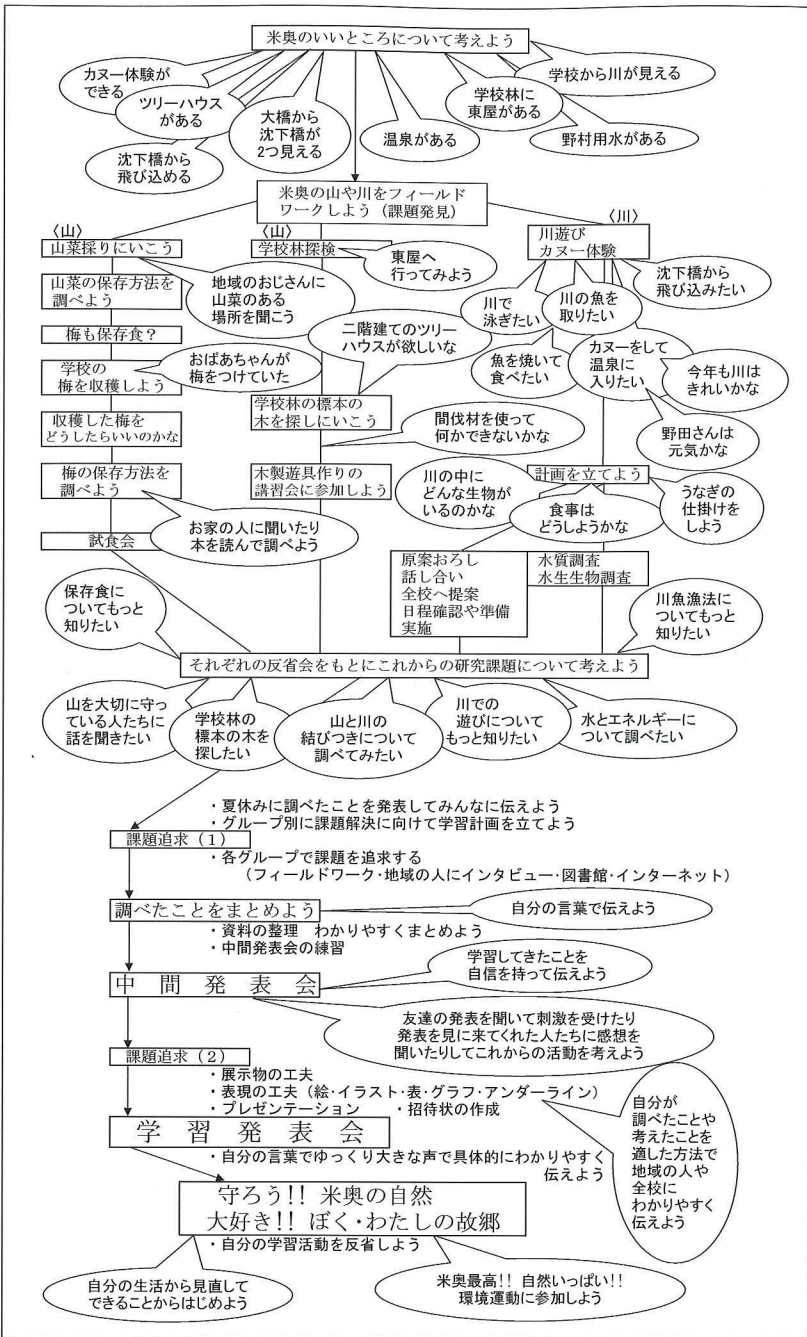
ている。また、学校林が近くにあるため気軽に散策することができ。三年ほど前から整備が始まり東屋や看板を設置するなどの取り組みを行ってきた。間伐材を利用してソリハウス作りも行った。すばらしい自然がたくさんある米奥の地域を当たり前と受け止めるのではなく、「すばらしい所だ」「自慢できる所だ」「これがぼくの故郷だ」と感じる人ができる人になって欲しいと願いながら、今年度の総合の時間の計画を実践してきた。(後略)

子どもたちは、中間まとめの公開研究授業でも、地域の多くのみなさんが参加した三学期の学習発表会でも、掲示物や資料を活用して活き活きと発表活動を展開しました。

先ごろ、「四万十川流域の文化的景観」が国の「重要な文化的景観」に選定されました。子どもたちが身近な米奥の自然や流域の暮らしを誇りに感じていることが、文化的景観に魂を吹き込んでくれるものと確信しています。

三十七年間の教職生活を締めくくりにあたって、身に余る麗しき学校、地域、保護者、教職員、子どもたちに出会えたことに感謝しています。

かじたまさと  
四万十町立米奥小学校校長



間々の成果として、  
◎これまで人任せにしてあまり進んで活動しなかった児童や、ふだんはおとなしく、輝ける場の少なかった児童たちが進んで行動し、「自分たちががんばればできる」という達成感を感じることができた。  
◎七人を二つのグループに分けたこ

とによって、お互いのグループが困っているときには助け合ったり思いやったりする気持ちや行動が見られるようになってきた。  
◎全校的な活動では、保護者や地域の人たちの助けがより充実した学習にしてくれた。また、教師も子どもも楽しむ学習の時間をつくること



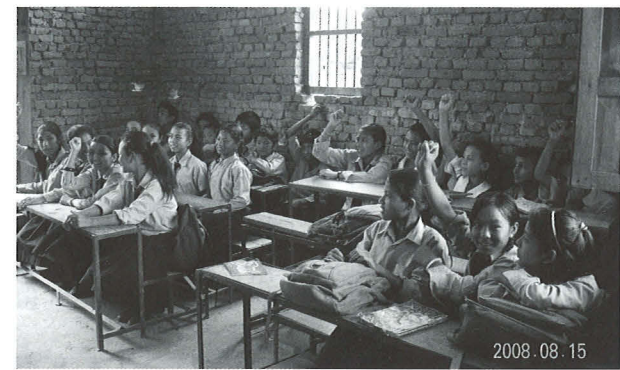
# ナマステ ネパール! (中)

嶋崎京都

今回の研修での訪問先のひとつ、マナバ特別学校では、高知県出身の青年海外協力隊ジュニアボランティアである上原さんの活動を視察した。この学校はいわゆる日本の特別支援学校のようなものだ。ネパールには約四百四十万人の障害を持った子どもがいるといわれている。しかし、それに対しこのような特別支援学校は十三校と少ない。障害を持って生まれてくるのは前世で悪い行いをしたためだと信じられているため、周囲からの理解が得がたく、差別的な立場に置かれてしまうのである。輪廻転生を信じるヒンドゥー教徒が国民の八割を占めるネパールにおける悲しい現実だ。

そこで、障害を持った子どもが生まれても、屋外に出さずひっそりと育てたり、地域などから差別を受けながら暮らさねばならなかったりするのだ。それゆえ、このような学校の存在は貴重で、保護者も積極的に学校の運営に協力をする。上原さんはこの学校でたくさん取り組みをして成果を上げていた。日本でも有名な童話や童謡を彼女がネパール語に翻訳し寸劇仕立てにして、それを子どもたちが

演じたり歌ったりする。その光景は本当に楽しそうで、見ているこちらも思わず笑顔になった。もちろん、そのような取り組みが最初からうまくいくわけではなく、さまざまな苦労をしながらひたつづつ前進をさせてきた結果である。現地の人々の文化や意向を尊重しながら、より良い暮らしのために住民らと手を取り合って尽力する日本人にたくさん出逢った。ネパールの人々の親日度合いの高さ



2008.08.15

が、それらの取り組みが間違いでなかったことを物語っている。アジア最貧国であるネパールは政治的にも転換期を迎え、大きく変わろうとしている。日本から来てほんの少し垣間見た私が言うのもおこがましいが、先進国といわれる日本の私たちから見ると、あれもこれももっと効率よくできそうでもどかしい。道路の整備やごみ処理場の設置、教育機関の拡充など、この国は可能性に満ちている。いずれにおいてもやはり各々の先導指揮を執る指導者の発掘、育成が急務である。学ぶ意欲の高い、次世代を担う子どもたちが多いネパール。どの学校の生徒も日本とは比較にならないほど勉強に対する意識が高い。遊ぶことと学ぶこと、どちらが好きか尋ねたところ、訪問した学校の生徒のほとんど全員が元氣よく「学ぶことが大好きだ」と答えた。そして私が、日本の子どもたちは勉強があまり好きでないことを伝えると、彼らは本当に不思議そうな顔をしたのだった。

（しまさきみやこ）  
高知県立高知南高等学校教諭



## 言葉

### の現場から⑭

「ローマの休日」のなぞを読み解く

広井 護

「ローマの休日」は好きな映画だが、なぜ「ローマ……」なのだろう？「パリの休日」では、この映画は絵にならないと思うのだが、その理由がうまく説明できなかった。特に、ラストシーンで、オードリー・ヘップバーン扮するアン王女が発する有名なセリフがある。王女と新聞記者ジョー（グレゴリー・ペック）の別れの場面だ。フォロロマーノ（古代ローマの巨大な遺跡群）の前で出会った二人は、お互いに身分を隠したまま、たった一日の「ローマの休日」を共にする。そして別れる。翌日の記者会見の広間で再会した二人は、お互いの正体を知ることになる。それは同時に二人の別れのときでもあった。

「今回の旅行で、一番心に残った場所はどこですか？」と記者団に聞かれて、アン王女は儀礼的に「いずこも忘れ難く善し悪しを決めるのは困難……」と言いかけるが、ふいに中断し、「ローマです。なんとい

つてもローマですわ」と唐突に叫ぶ。そして「今回の訪問を私は生涯にわたってなつかしむでしょう」と結ぶ。深く哀切な響きがこめられた言葉だ。このセリフの中の「ローマ」を他の都市と置き換えることはできない。そんなことをすれば、何か大切なものが失われてしまう気がする。だがそれがどうしてなのか、長い間わからなかった。

私見によれば、それは古代ローマは滅んだ後も残ったからである。どこに残ったか？人々の心の中に残ったのである。あるいは、フォロロマーノの遺跡の中に残ったのだ。とすると、王女の言葉は、それを受け取ったジョーの中で、別の意味に変わったのではないだろうか。「二人ですごした一日は永遠です。でも、それは二人の思い出の中だけ永遠なのです。……あのフォロロマーノの廃墟のように」王女と別れたジョーが訪れる場所は想像できる。それは、二人が初めて出会った場所。フォロロマーノの廃墟の前である。遺跡の前に立ちつくしたジョーは、そのとき王女の言葉をかみしめたはずである。（ひろいまもる／土佐中学校教諭）

第4回美術作品コンクール ～Concours des Tableaux～

【関連記事 4～5ページ。受賞作品は5ページに掲載しています】

財団法人高知市文化振興事業団は長期的な目標のひとつとして、「芸術文化を創造する人材の支援・育成」に取り組んでいます。その中の「美術分野における地元アーティストの作品審査・展示会の支援」は平成17年度に創設され、今回4回目を迎えました。

1月20日（火）から25日（日）まで、文化プラザ市民ギャラリー第1・2展示室で全応募作品を展示し、多くの方に見ていただき、最終日に美術評論家・榎木野衣氏による公開審査が行われました。

今年は県内在住・出身の若手作家（18歳以上35歳未満）43名から52点の応募があり、会場には様々な手法の個性溢れる絵画が並びました。訪れた人は、自分が審査員になったような気持ちで1点1点をじっくりと鑑賞されたようです。「画家の若い感性に刺激を受けた」という感想とともに、「より多くの作家の参加を望む」「出品者の成長を見たい」という今後への期待も寄せられました。

最優秀賞（賞金30万円）には四万十市出身の佐竹龍蔵さん（22歳）「冬の散歩道」が選ばれ、瀧石公子さん（30歳）「ある日の深呼吸とため息と」、今崎順生さん（30歳）「winter」がそれぞれ優秀賞（賞金各5万円）を受賞しました。最優秀受賞アーティスト・佐竹さんの作品展は、21年度の高知市文化振興事業団主催の企画展として12月に開催される予定です。



美術中級講座 「日本画／陶芸 スキルアップカリキュラム」

美術の実技講座では初心者を対象としたものがほとんどだったため、次のステップを目指す中級者のための講座として「美術中級講座」を開講しています。2月からは「日本画」と「陶芸」の二つの分野の講座が開講しました。

2月10日から3月17日までの「日本画」教室には講師に土居恒夫先生をお迎えしました。受講生はそれぞれが明確な目的を持って参加しており、講師から画材や技法についてアドバイスを受けたり、受講生同士で批評したりしながら自分のペースで制作を進めています。

2月14日から3月8日までの「陶芸」教室には講師に川村雄二先生をお迎えし、モデル作品の模作をテーマにした講座を行っています。高いスキルを持つ作家の技法をまねてみることで、自分の作品の幅を広げることが目的です。

どちらの教室も講師の熱心な指導のもと、充実した制作が進んでいます。



ペーパー・ラボ  
ギャラリー

刈谷友彦



木と紙のぬくもりに包まれる空間。古い民家から受け継いだ床板、太い梁。和紙を貼った壁に囲まれていると、ほっと気持ちが落ち着く。そんなスペースがペーパー・ラボギャラリーです。

ペーパー・ラボは、一九九〇年に旧伊野町で誕生しました。「ペーパー・ラボ」

暮らしのなかで和紙を身近な素材として見直し、使いこなしたい。それは、いわば「用の紙」です。「用の紙展」は、毎年テーマを変え、いの町紙の博物館で十年間開催しました。高知だけでなく、全国からもご参加いただいた展覧会です。



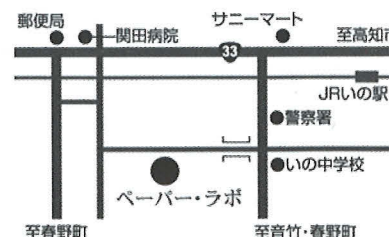
シヨップを開店しました。場所が市内から外れ少しばかりわかりづらい所ではありますが、落ち着いた環境だと思えます。早春には、和紙の原料でもある三桮の花が咲きます。このシヨップの二階にペーパー・ラボギャラリーがあります。

すっかり年末の恒例となった企画展「お正月かざり展」をはじめ、貸しギャラリーとしても多くの方にご利用いただき、心地よいアートな空間が生まれています。貸しギャラリーは、作家さんが気軽に発表できるよう、低価格での提案をさせていただきます。展示期間は約一カ月です。個人（またはグループ）の作品を展示販売していただける方



はぜひお問い合わせください。さまざまな紙が漉かれている高知ならではの産地シヨップとして、皆さまのお役に立てればと願っています。ペーパー・ラボギャラリーは、小さなギャラリーですが、高知在住の作家や、和紙にゆかりのある作品をご紹介します。ぜひお問い合わせください。

（かりやともひこ）



ペーパー・ラボギャラリー  
吾川郡いの町四〇一〇  
電話〇八八―八九二―四〇一〇  
日曜日定休  
<http://paperlabo.seesane.net/>

# 最終回

この街は一度、すっかり灰塵に帰した。空襲と地震が、時と共に積み重なる風景の流れを止めてしまった。だけど、お城とこの時計台だけは、戦前と変わらぬ風景を今も保ち続けている。もはや私たちにとって当たり前のようにそこにあり、その価値すらわからない▼景観というのを考えるとき、「もしこの建物がなかったら」と考えてみる。日曜市や電車がなくなって、ただの広い通りだったらどうだろうか。時計台がなくてマンションが建ち、城はなくてただの山だったら。たぶんこの街の景観は、なんの面白みもないものになっていたはずだ▼景観の価値というのは、失われてはじめてわかる。その逆もまたしかり▼されどこうした景観への配慮や気持ちは追いつかない。行政の景観対策もここ数年でやっとだいぶ整備されたものの、遅きに失した感は否めない。失う前に、もう一度。気がつけば4年前に出版した『高知遺産』でも、登場した数多の景観が失われてしまった。そしていまま、あちこちで価値ある景観が消えているのが、今の高知の現状なのである。

# 景観考

タケムラナオヤ

# 風俗

## 無駄を背負って

前にも「思い出は歳とともに多くなり、それにつれて持つ荷物も次第に多くなる。だから人生の半ばを過ぎるころから、その荷物は少しずつ減らしていくのが理想だ」という意味のことをこの欄に書いて。しかし、人生の三分の二を既に過ぎて、なお多くの荷物をかかえている自分を振り返ると、理想は理想として、やはり歳をとれば思い出のモノとともに暮らすのも人間の習いかも知れない、とも考えるようになった。

歳をとるにつれて、友人や知り合いも次第に少なくなっていく。その上に思い出のモノが身の回りからなくなると、実に寂しい限りではないか。荷物といってもたいしたモノではない。幼いころの娘にもらった涙ぐんだ手紙だとか、息子の小学校時代の絵だとか、青年時代に感動した色あせた文庫本の数々、暇になったら読もうと思っている名作。それになんとかなく捨てつづらけて置いているガラクタなどなど。

身近な知り合いがこんなことを書いていた。「必要なものだけの生活が楽しくないのは、無駄がないための余裕のなさではないか。人間は必要不可欠なものだけでは生きていけない」と。なんだか教えられるような気持ちになったものだ。

歳をとればとるほど、残された人生を喜びたいものにしてほしいと思う。だから、他人にとっては無駄でゴミのように見えるようなものを背負って、楽しく生きていきたいと思う。死んだ後のゴミの処理まで考えたくないのだ。

(蘇)

# 文化高知

## 定期購読のご案内 賛助会員募集中!!



賛助会費  
2,000円  
(年額)

財団法人 高知市文化振興事業団の  
機関誌「文化高知」を  
年6回お手元に。

お申し込みは・・・  
事業団にお電話でどうぞ。  
次号に郵便振替の用紙を  
同封してお届けいたします。

お申し込み・お問い合わせ  
(財)高知市文化振興事業団企画事業課  
Tel 088-883-5071  
毎週月曜休業(祝休日は除く)

## 今号の表紙

「春」  
角田美和

猫の顔ほどの我が家の庭にも春が来ました。ご近所の方や友人からいただいた球根や苗が育ち、次々と花を咲かせています。クリスマスローズ・スイセン・パンジー・アジュガ…。色とりどりの花たちは、その香りとともに私を元気にしてくれます。そして、幸せな気分になるのです。そんな春を表現してみました。  
(すみだみわ)



## 高知を撮る

第24回写真コンテスト入賞作品

## 遅い解禁

(平成19年12月 仁淀川)

北村 健三

落ち鮎漁の不漁を懸念して解禁日を例年より2週間遅らせたが漁は少なかった。

信義を守って奸策を弄せず、公明正大に生きることは立派な生き方で賞賛に値するが、世の中そんな正直者はかなりではない。現実を見ると、信義など露ほども意に介さず、悪知恵の限りをつくし、利をむさぼっている人が多くいる。苦々しい限りだが、世の成功者と言われる人の中にも、こういう人がいることは事実だ。

する賢く立ち回るのも、世渡りの知恵の一つくらいに考えているのだろうか。いつまで経っても止まない食品偽装などを見ているとその感が強い。食の問題はただちに健康に関わるだけに、いやでも気になるのだが、類する話は政治にも企業の経営にもある。

こちらで、生命や生活に関わるものが多く、見過ごすことはできない。問題が露見しているという言い訳をしているが、言い訳はごうあるうと、やっていることは奸策を弄したやりの口そのものだ。

それにしてもいまの世の中、悪がはびこり過ぎていないか。悪がはびこ

## 「正直貧乏 横着栄耀」



風俗歳時記

ではそれでどれだけ法令順守や社会規範が厳格化されるというのか。気取らず普通に言って、正確に意味が通じる表現をよしとしたい。

「正直貧乏、横着栄耀」では世の中にお先真っ暗である。素朴に「正直の頭に神宿る」といえる世がほしい。

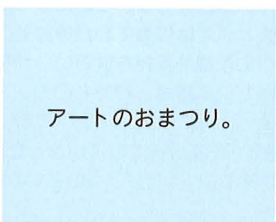
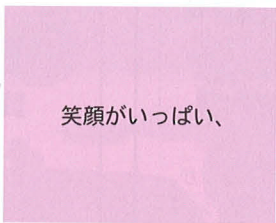
(蘇)

つてワリを食うのはいつも正直者の側である。そのいい例が大騒ぎになっているのは、社保庁や会社でなく、まぎれもなく汗を流して働いてきた人たちである。率先して法を守るべき立場にあるものが、それをやるのだからあきれましょう。

そもそも法令順守や社会規範の厳格化を「コンプライアンスなど」と言ってしまうのは、簡単な「法令順守」ではないか。それをわざわざ「コンプライアンス」と舌がもつれるような言い方をしているから、肝心なところがぼやけてしまう。何語で話そうが自由だといえ、それまでだが、



(財)高知市文化振興事業団主催事業のご案内



CUL-PORT \* ART NPO TACO

# ホリカワアートミーティング

2009 Spring

2009.4.19 sun 11:00~18:00 高知市文化プラザかるぼーと 前広場

※雨天時は3階ギャラリーにて開催



■主催：(財)高知市文化振興事業団・特定非営利活動法人ART NPO TACO

■お申し込み・お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071 <http://www.bunkaplaza.or.jp>

# World Music Night vol.2

ワールドミュージック ナイト  
世界の音楽と料理を楽しむタベ



musician

Tipton Hill Boys  
Grey Goose  
Tia Tahitians

国際的な音楽交流を中心に高知を楽しむプロジェクトがお届けする、世界の音楽と食べ物を一度に楽しめるワールドミュージックナイトの第2弾。今回は、本場アメリカからブルグラスバンド、高知からはアイリッシュバンド、タヒチアンバンドによる計3組のライブと、会場限定のスペシャルな料理屋台が出演します。ここでしか食べられない料理を味わい、ここでしか聞けない音楽を聴いて、ちょっと贅沢な夜を過ごしませんか？

2009.3.28 SAT 18:00 open 18:30start

CUL-PORT 3F GALLERIA

■主催：国際的な音楽交流を中心に高知を楽しむプロジェクト・(財)高知市文化振興事業団

■お申し込み・お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071 <http://www.bunkaplaza.or.jp>

前売り ¥1500

当日 ¥2000 ドリンク・フード別

<http://www.bunkaplaza.or.jp>

e-mail [bunshin@i-kochi.or.jp](mailto:bunshin@i-kochi.or.jp)

文化高知 No.148 「隔月発行」  
2009年(平成21年) 3月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780-8529 高知市九反田2番1号  
TEL(088)8833501(代表)郵便振替01680151148669